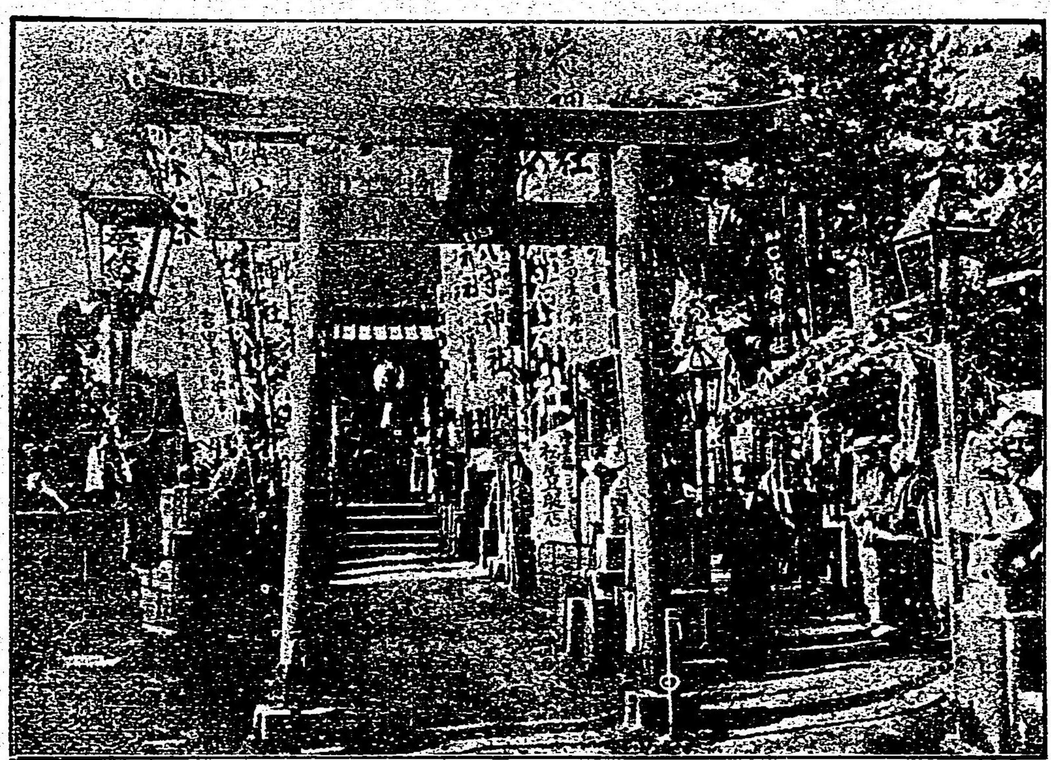
228
7
P.6

妖怪談叢

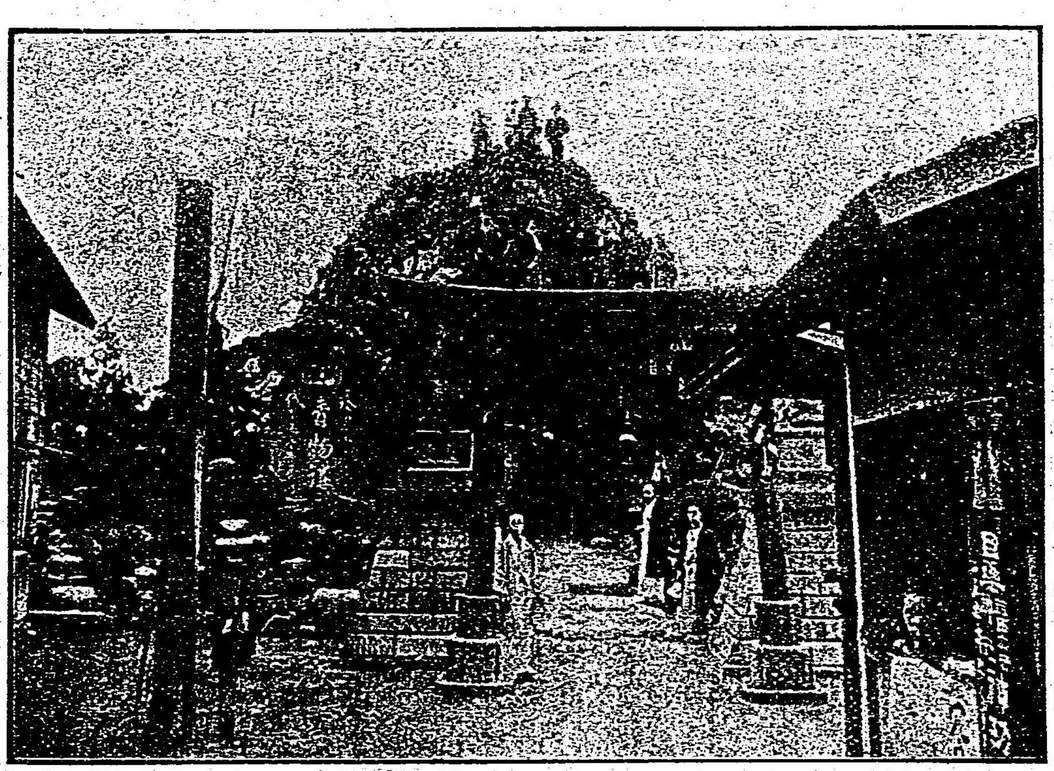
死守稻荷



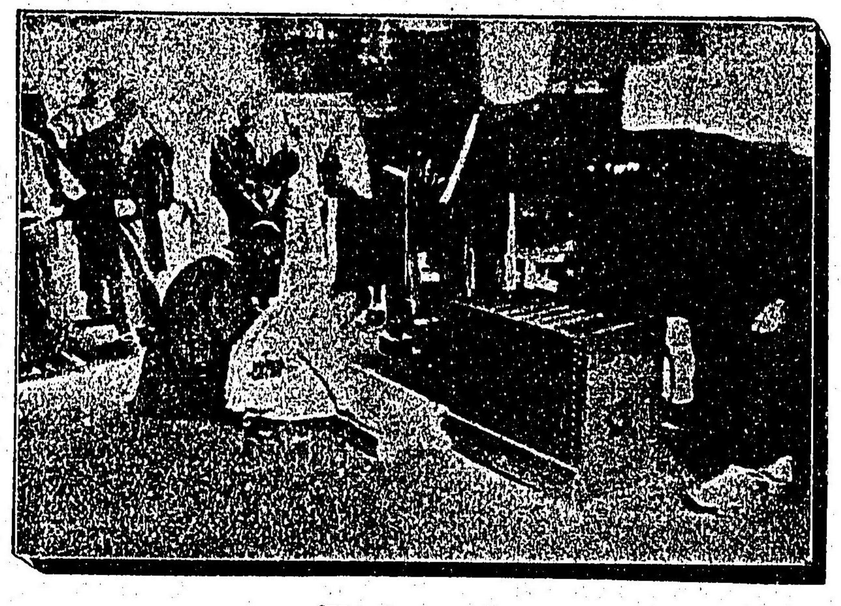
穴守神社正殿の圖

特53
103

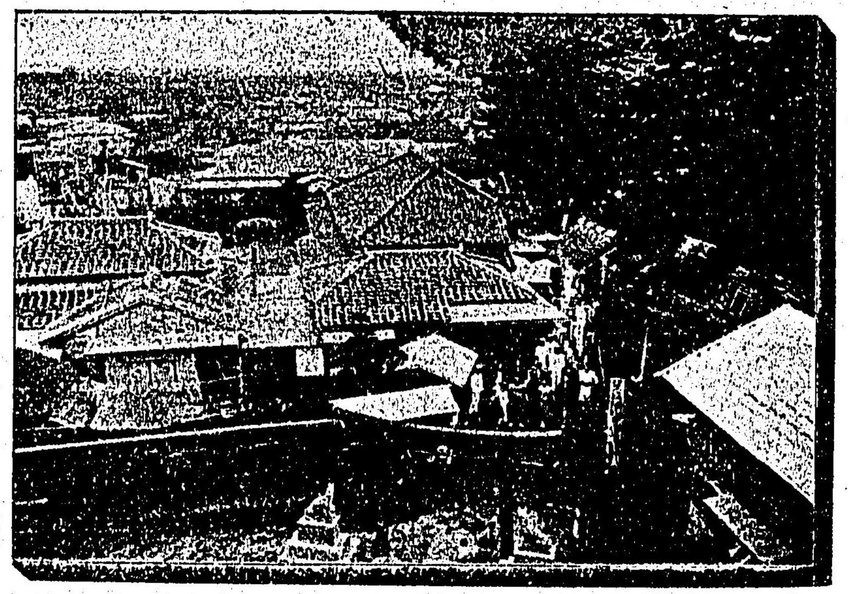
圓の揚げ場行水



靈山の圖



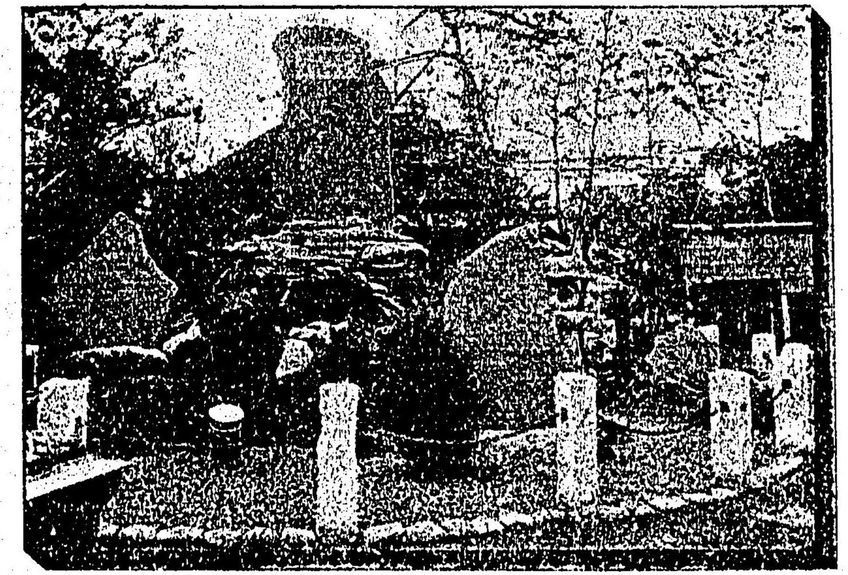
御穴の圖



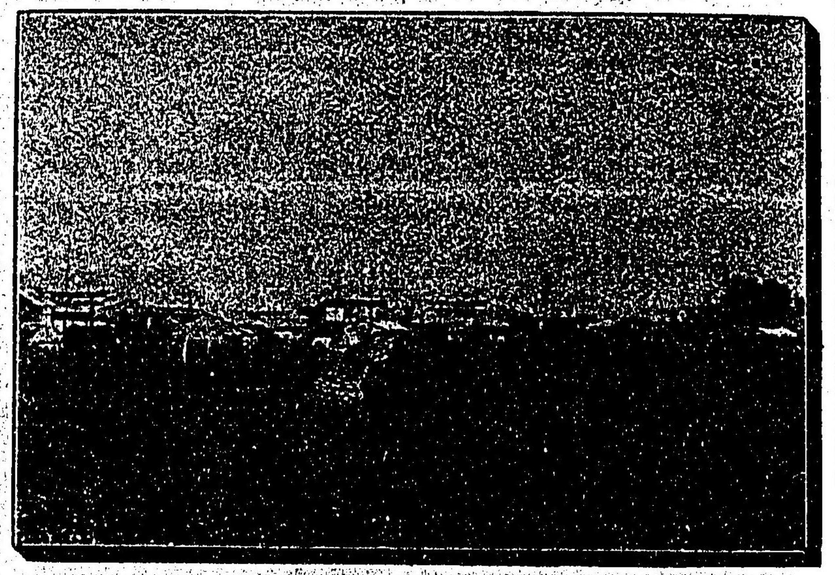
靈山より社務所及遊園地を望む

族一の所務社

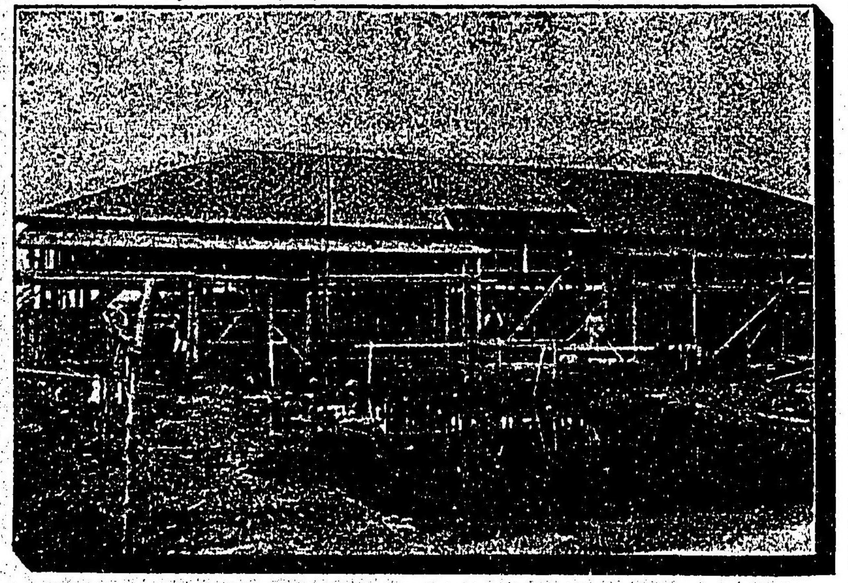
寶明講寄進の手洗場の圖



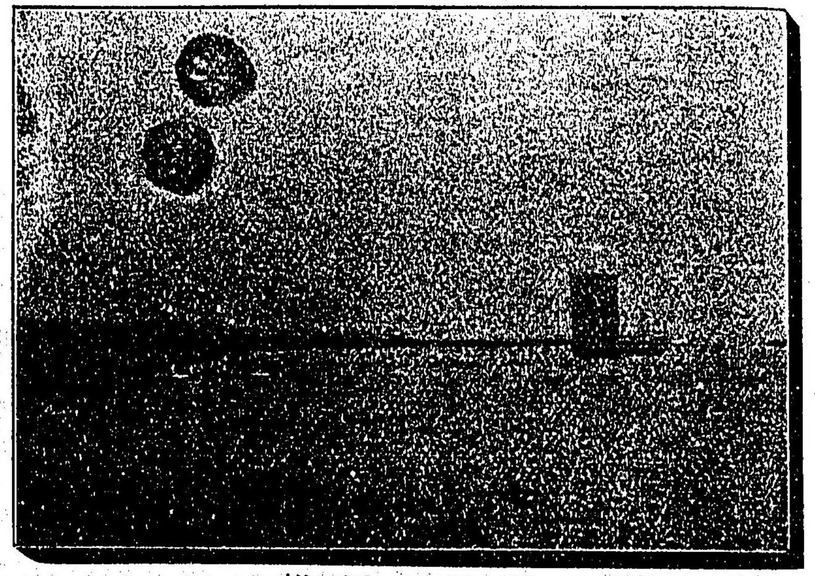
金子氏紀念碑



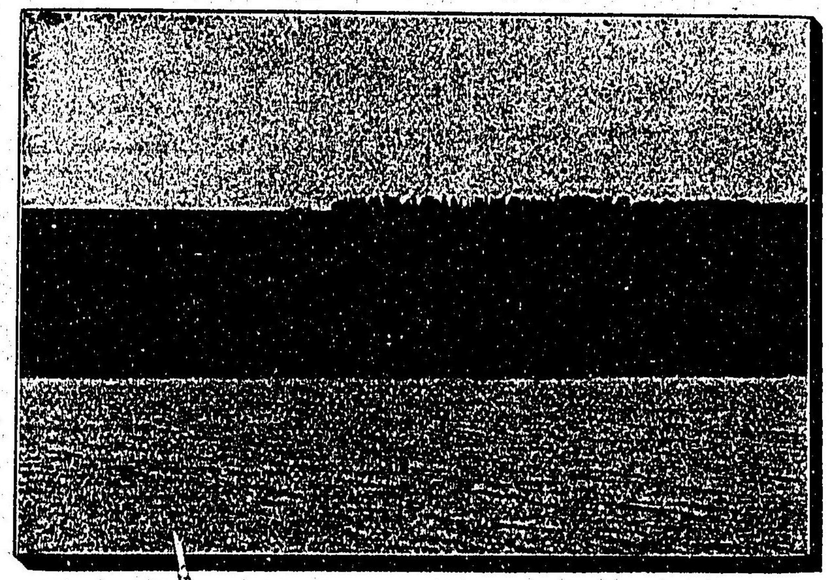
いろは牛肉店寄進の大鳥居を遠方より望む圖



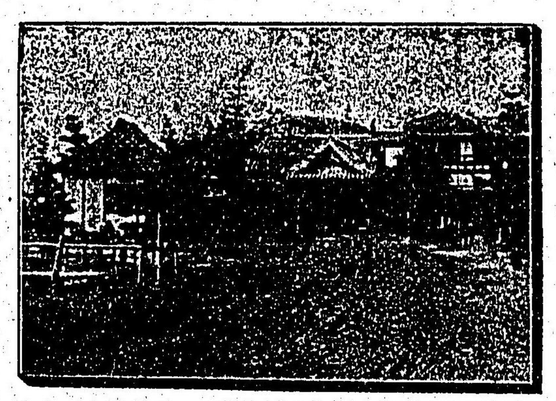
開運月參講本部新築中の圖



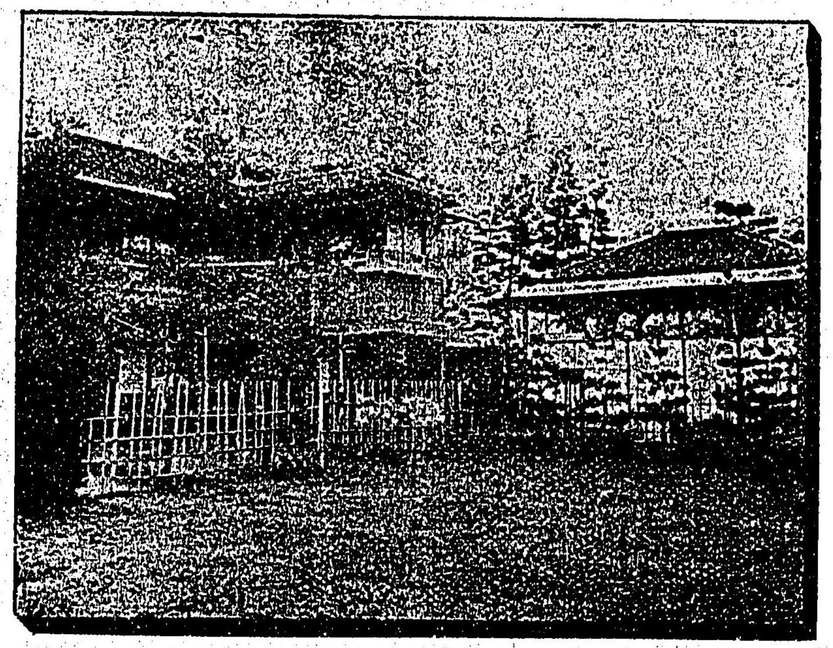
羽田の鬱帆



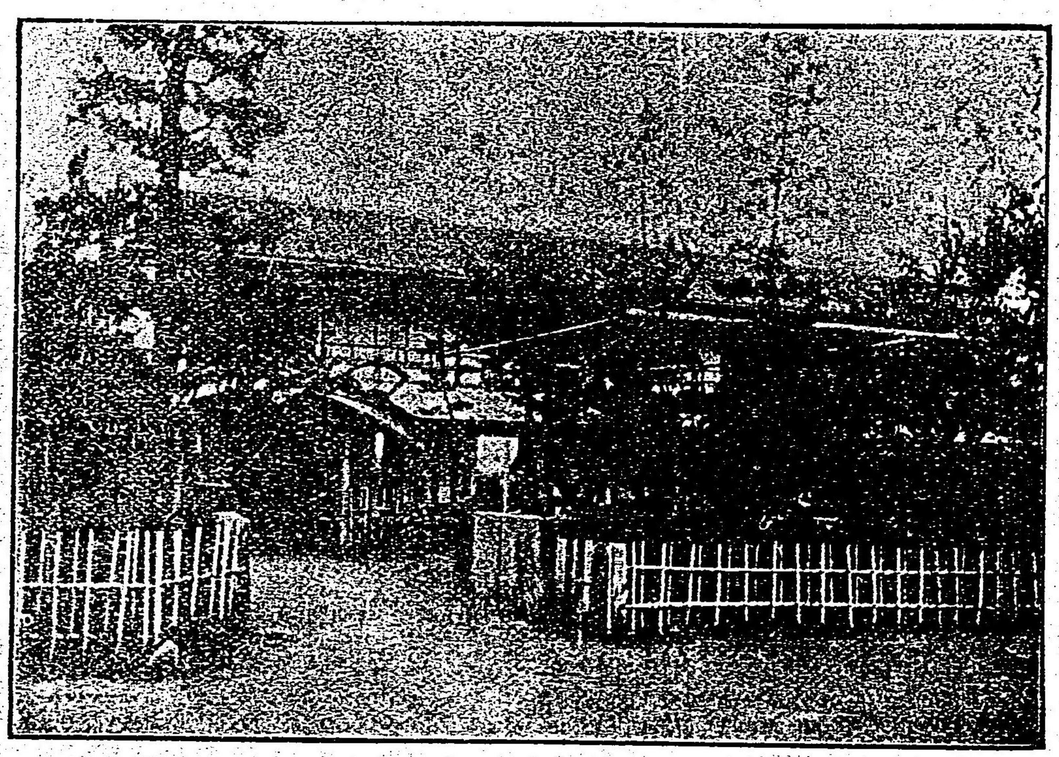
森ヶ崎より羽田穴守の森を遥に望む



要館玄關の圖



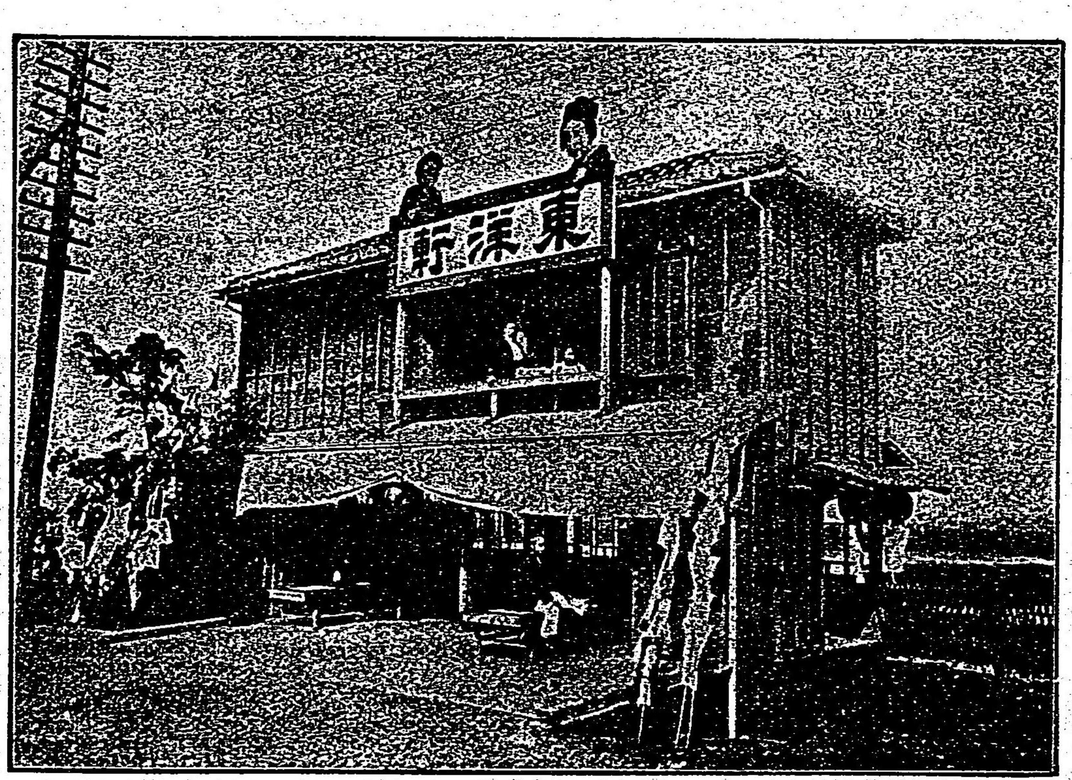
料理兼旅亭要館側面の圖



旅亭兼料理店和泉館

旅館兼料理店　西本館

館田羽同



大森停車場前茶亭東洋軒

序

實にや我日の本の國は、太古伊弉諾册の二柱の神神拓きに拓かせ給ひし州にて、されは神國神州なんと稱へて、八百萬の神神守りに護り給ふ。さるか中に武藏の國の片邊荏原の郡羽根田の郷に、穴守稻荷大明神と申し奉る神在して、靈驗まことに赫灼に畏く、參詣の人々踵を絕たず、そもそも羽根田の亦の名を、要島と申し侍るは、我日の本の要ともなりなんとおるべし、おのれ、

も久しき頃より此所に詣で親しく靈驗のいみじきを見もし聞きもしつるものからこたびこの書の世に出つる事の頓に嬉しくて拙き言の葉をも顧ず斯く序を書付け侍る穴賢これも神州に生れし身の神いさめの言の葉の一つども見許し給へかしこ只管々々願ひまつるになん

明治三十五年の文月

源朝臣ちふる

謹みて識す

信仰美談

穴守稲荷目次

第一　我日本の國體……一
第二　奠天敬神の事……二
第三　信仰の要義……四
第四　穴守神社開基……十一
第五　穴守神社沿革……十四
第六　靜岡分社開基……十七
第七　靈驗靈著の事……二十三
(一)　鳴島雁藏祈願の事
(二)　玉井磯吉信心の事
(三)　雙善四郎參籠の事
(四)　外人靈驗に驚く事
(五)　支那人靈驗に感ずる事

目次

（六）要館主人神慈に關るゝ事
第八　白狐木像由來……三十五
第九　奉納大華表の事……三十七
第十　講社と講員……四十
第十一　境内靈山の事……
第十二　信徒篤志の事……
（附故金子典の碑）
第十三　神苑の工事……
第十四　附近の名勝……
附名物
第十五　參詣の栞……

目次終り

信仰美談

宍守稻荷

第一　我日本の國體

抑々我日本國の國体を甚麼にと尋ねて見るに、我國は往昔から神國或は神州なぞゝ云ふ程で、彼の西洋諸國や支那などゝ全然違つた國体で、神が開いた國なのである。即ち天照大神と云つて、天皇陛下の御先祖が此國を開いたので、我々人民の先祖も又太古は神であつたのである。されば日本國に生れた者は皆神の子孫なる譯であつて、隨つて神を敬ひ信ずると云ふ事を忘れてはならない。先づ此國を開かれた天

照太神を祭り、又各自の先祖の神を祀り、皇室を尊み、國家に忠を盡くし、祖先を敬ひ親に孝を竭くし、而して日本國民の本分を全くせねばならぬのである。

第二　奠天敬神の事

偖前にも記した通り、我日本國に生れた者は必ず神を敬ひ信仰せねばあらぬ。そこで多くの人の中にはこの信仰と云ふ事を間違へて居る人がある。外でも無い、只譯も無く拜みさえすれば能いと思つて居る人があるので、それは大變な間違ひである。即ち信仰と云ふ事には一意專念と云ふ事が大切なので、その一意專念と云ふ事は何う云ふ事かと云ふと、心に他念を挾まない、一圖に信仰する事で、若し然うで無く心に外の事を思つて居て神を拜んだのでは、信仰でも何でも無いのである。それから次に神と云ふ者が那麼な者であるかと云ふ事を知らねばならない。尤も神と云ふ者は目にも見えない、又手にも觸れないけれども信仰さえ怠りなくして居れば自然と神と云ふ者は那麼な者だと云ふ事が知れて來るのであれには前記した通り一意專念に信仰するのが何よりなのである。多くの人の中には神を無いとか有るとか云ふ人があるが、それは其人が心に邪念を持つ

て居るから神が分からないので、畢竟惡人が神を拜んでも更に利益が無いと同じ樣な譯なのである。それであるから神を信仰する者は心に邪心を持たず、又種々の慾望あどを捨てゝ、誠意から信仰せねばならぬのである。

第三　信仰の要義

第一　信仰の人にして神前に拜禮せんとする者は、先づ自分の姿勢を正し心氣を平かにして、祝詞を唱へ神慮を慰め奉り、其後初めて祈願の趣を願ひ奉るべし。

第二　信は眞なり「まこと」なり、仰は「あふぐ」なり、されば信者は心に邪念邪慾を去り、清淨垢無き心を以つて、眞心より一意專念に祈るべし。

第三　神は非禮を受け給はざるが故に、嫉妬怨恨其他非望の願は構えて願ふべからず。若し非望の願望を祈る時は、啻に其靈驗無きのみならず、却つて罰を蒙むる事あるべし。

第四　敬神の大道を守り且つ語るべきも、不可思議は口にすべからず。心に孜へて悟らざれば、道の學者に就きて聞くべし。妄りに信じ輕々しく云ふは、神を蔑にする者にして、道に害あるとも益なし。

むべし。

第五　漫りに禍福吉凶を云ふべからず。信者は常に能く其平生を慎み、不義無道の行動あるべからず。若し然らざれば、何程祈る共其霊験無かるべし。

第六　世には已の生命を賭けて、父母兄弟などの病氣平癒を願ふ者あり。是等は其志ば誠に殊勝なれど、若しそれが爲めに已れの生命を縮むる如き事あらば、必ず神を怨むに至らん。之れ神を信ずるに非らずして、神に溺るゝなり注意すべし。

第七　神を信ずるに食断水断等を爲す者あり、これ大なる誤りなり。假令甚麽なる事ありとも、人生に

必要なる飲食物等を断つ如き事あるべからず。尤も用ひて益なき者害ある者等は、之を断つも能し。

第八　世には只神にのみ依頼し、病者の薬餌等をも断つ者あり。之れ即ち人の迷ひにして、甚だ戒むべき事なり。故に病者等あらば適當の薬餌を與へ、而して別に神に願ふべし。

第九　経に「身體髪膚之を父母に享く敢へて毀傷せざるを孝の始めとす」とあり。されば常に身を慎み、行ひを正しくし而して神を信ずれば神自ら利益を與ふべし。

第十　學に曰く國を齊うせんと欲すれば先づ家を

齊うす、家を齊うせんと欲すれば先づ其身を齊うす、其身を齊うせんと欲すれば先づ其心を齊うすと、即ち慎むべきは一身なり、一身正しくして神初めて霊験を示すなり。

以上十ケ條を能く〳〵胸に收めて、而して神を信じなければ、いくら神を信じても利益が無い者と思はねばならぬ。それであるから平常の心掛けが第一と云はねばならぬ。

何事の在しますかは知らね共
忝け無さに涙溢るゝ

これは西行の歌であるが、神様々々と云つても目には見えない、そこで何事が有るか分らぬが、自然と有難味が心に感じ涙が溢れると云ふのである。實に信仰の誠を現はして居る歌である。

第四　穴守神社開基

東京の西南即ち荏原郡の東北に羽田村と云ふ村がある、その村の一角を俗に鈴木新田と云つて、一つの小さな島の様になつて居るされば一名を要島又は扇浦なぞゝ云つて、南の方は多摩川の流れに沿ひ、西は多摩川の支流の蝦取川に臨んで居て、東北は東京

灣を控へて遠く上總房州の山々と對して居る。土地高く四方廣々として、景色殊に能く四時の眺望孰れも皆絶佳であるが就中夏季の納涼には海水浴もあり礦泉もあり、最も妙である。舊記に依れば此地は元荒蕪不毛の廢地であつたのを、安政の頃土地の豪農に鈴木彌五右衛門と云ふ人があつて、空しく廢地にして置くのを慨き、自分獨り資を出して村民に開拓させたのが即ち此所で、本島と飛島とを合せて廣さ百六十町歩程である。即ち鈴木彌五衛門と云ふ人は此地を拓いた先祖で、其功業と云ふ者は實に立派な者である。それで此鈴木と云ふ人は先祖が紀州の人で、故あつて關東へ下つて來たのであるが、誠に稲荷が、信仰して自分の家に祠を建てゝ狐を養ひ、その狐を新田の守護とした。それが即ち今の穴守稲荷神社の開基で、其後世が種々に變つたにも拘はらず穴守稲荷は長へに繁昌して、今日では實に靈驗顯著の神として益々信仰されて居る。それに就いて此の穴守稲荷を勸請した鈴木の家は何うあつて居るかと云ふに今でも現に其の子孫が連綿と殘つて居るのである。

鈴木家の事

本家と隱宅とあつて、本家は羽田獵師町にあるが、隱

宅の方の主人が彼の彌五右衛門の正統の子孫で、今ても穴守神社に關係して居る。それで其系圖を示せば

元祖鈴木彌五右衛門（穴守稲荷開基、安政頃の人）

二代鈴木常三郎（安政の暴風雨に堤防を奪はれしも復舊工事を完して死す）

三代鈴木彌五右衛門（即ち當代の鈴木氏なり）

と云ふ次第で、連綿と續いては居るが、惜しい哉今は零落して子息の嘉之助と共に穴守稲荷神社々務所に居るのである。天命は何うも仕様の無い者と思はれる。

第五　穴守神社沿革

偖前記の如く鈴木家が零落したに就いて、穴守稲荷への設備も自然疎かになつて仕舞つた、けれども、それを種々骨を折つて、今日の有樣に盛り立てたのは、橋爪、高橋、金子、鈴木、須山、伊藤、村石、横山兄弟、外二十七人の人々で、明治十八年の六月の頃今の穴守神社の在る所や又其附近の土地を買入れて、それが爲め今日迄幸に清淨なる社地を濱す樣な事も無かつた。それで其買入れた地面の面積は十五町五反歩ておつて、それ等の人々の内で、高橋、村石二氏（辭退）を除く

の外は皆相變らず、現に社務所に居て事務を取つて居る相である。

社地や何かの事は以上の通りであるが、追々信者の殖ゑるに隨つて、何分以前の儘では不便でならぬ。そこで日本橋小網町三丁目の鹽問屋「きぬかはや」が一手寄請で、羽田村字麹谷から蝦取川迄の間延長千間幅二間餘の敷地（田地買上金、金七百五十圓）を寄附して、これを道路にするのに京橋區木挽町の船宿峯龍外數百名の人が工事の費用を出して茲に初めて新道路が出來たのである。

次に新道路から拜殿迄の道である。蝦取川迄の新道路は幸にも信徒の中の篤志者が寄附して呉れて出來たけれども、肝要の拜殿迄の道が甚だ不便なので、社務所で之を拵へる事となつたが、何分千餘圓の工事費用であるので、社務所の困難は非常の者であつた。それで社僚の金子市右衛門氏に相談して、氏が工事費用支出の方法を定めて尚又氏を出納一切の主任に任じて、大に社の爲めに力を盡したので、幸に今日の隆盛を見る譯になつた。即ち金子氏は穴守稲荷神社に取つては、第二の鈴木彌五右衛門と云つても能いのである。

第六　靜岡分社開基

穴守稲荷本社の開基は以上記した通りである、次は靜岡の穴守稲荷分社の開基であるが、實に靈驗顯著の證據と云つても能いのである。

駿河國清水港の片邊に今澤幸平と云ふ魚商があつて其幸平の女房にお熊と云ふ女があつたがこのれ熊が七年前から病氣に罹つて近所近邊は云ふに及ばず、諸所方々の名醫にかゝるやら又能い藥品を買つて飲むやら、種々手を盡したが少しも効驗が無い、そこで今は本人は元より、亭主の幸平も迚も助からない者と斷念めて居た。すると或日の事、夜更けて宿を貸して呉れと云ふ者がある。幸平が出て見ると壁親子の五人連れで、旅を廻つて歩るく者と思はれるのを、家へ入れて種々と介抱してやると、その壁がお熊の病氣を聞いて「偖々氣の毒である、うれあら東京羽田の穴守稲荷を願つて御覽じろ、實は私共も大變御利益を受けた事があるから、今夜御厄介を願つた御禮に御知らせ申す」と云ふので幸平夫婦は半信半疑ながらも、壁の云ふ儘に穴守稲荷を信ずる心にはなつたが、穴守と云ふ名を忘れて仕舞つた。そこで、壁の生國が美濃だと云ふ事を聞いたので一心に

美濃様々々と信心して居る内に二日三日と過るに隨つてお熊の病氣が次第々々に能くなつて、後には全然本復して仕舞つた。サー夫婦の悦喜は元より近所近邊の人々も聞傳へて信心する、目に見える樣に利益がある、其内にお熊が夢に穴守稲荷であると云ふ事を知つて、それから御禮參りやら御札受けやらに、總勢三十餘人で羽田の本社へ參詣に來たのが、丁度明治二十九年の夏の頃であつた。

偖もお熊初め一同は羽田の本社へ來て見ると、聞きしに勝る神靈の尊さに益々隨喜渇仰の涙を流し、種々の奉納物などをして歸つた所が、その噂が何時しか清水港さては靜岡の町々へ迄知れ渡り、日々參詣に上る者が多くあるので、幸平夫婦と其他の有志が相談して取敢へず清水上町一丁目に假の祠を設けて本社からは分靈を願ふ、一方に縣廳を經て内務省の許可を受ける、又社殿を新築し神職を聘して、茲に穴守稲荷靜岡分社と云ふ者が出來たので、それで明治三十一年十二月二十七日の事である。而して其分社で信徒を擴げた所は、三島町向ふは遠州一帶、北は山梨縣甲州の全部で現に講衆と稱へて居る者が一萬八千余人居るのである。

望海毎談と云ふ書物に「昔時高輪は海邊の細手にて、されば羽田沖より泉岳寺の杜(此頃は泉岳寺も無かりしなり)を望み、品川沖を往來する船皆泉岳寺の杜を目當にしたり」と書いてある。して見れば羽田は昔から名高い所で、泉岳寺の杜と向ひ合つて景色の能い所であつたのである。

第七　靈驗微妙の事

(一)　鳴島雁藏祈請の事

今を距る十八年即ち明治十七年の頃の事である。武藏國荏原郡の片邊に農業の片手間に魚を漁つて糊口する鳴島雁藏と云ふ者があつたが(今は金藏と呼び本年六十六歳にて尚存命なり)女房お兼(其頃三十六歳)が三年前から重い病氣にかゝつて、醫者にかけ又藥を飲ませ、種々手當をしても何分にも思はしく無い、されば云つて打棄ては置けず、日々醫者を呼迎へ藥を飲ませるのであるが、甚麽にせん余り有福な家でも無いので、日々稼がねばならず、隨つて養生も思ふ樣に出來あい、それで或日雁藏は釣竿を擔いで釣に出懸け衣物を岸へ脫捨てゝ遠く沖へ出て釣りをした處が、思ふ樣に得物が有つたので、獨りホク〳〵と悅んで岸の所へ來て見ると、衣物と一緒に

置いた三尺帶が影も無い、不思議に思ひながら開處此處と捜して見ると、古い大穴の口に其三尺帶の端が見えたので、雁藏は心の中に首肯き「偖は豫て聞いた通り、庄屋彌五右衛門殿の土藏に年古るく捿んで居た白狐があつて、それが今は此土手に居ると云ふ事であるが、若し然うならば自分も要がある」と、先刻釣つた魚を其穴へ供へて、偖、祈つて曰ふに「狐よ狐、若し靈あるならば此雁藏の願ふ事を聞け。自分には最愛の女房があるが三年以前から病氣にかゝつて未だに癒らぬ。あい今は只死ぬのを待つ許りである。何卒この雁藏夫婦の心中を察し若し癒る者ならば暫ら

くの間でも癒して呉れと件の獲物を殘らず穴の中へ入れて歸つて來た。すると其晩から雁藏の家の周圍に狐の鳴く聲が非常にしたと思ふと、今迄寢床に呻吟して居た雁藏の病氣が、薄紙を剝ぐ樣に能くなつて僅一週間の中に全然平癒して仕舞つた。雁藏夫婦の喜悅は云ふに及ばず、種々の供物をする、御禮參りに行くと云ふ譯で其話が漸々に擴がつて後には今日の樣に盛になつて來たのである。

（二）王井磯吉信心の事

今は昔いろは四十八組の仕事師の中にさ組の仕事師に玉井磯吉（本年六十六歳）と云ふ者があつて其頃

又芝區松本町に廣島屋半七と云ふ饅屋があつたが、女房お房との間にれ辰（其頃十三四歳と云つて容色人並に優れた娘を持つて居たが何ういふ因果か生來の跛者で、それを見る兩親は其子が容色が能い丈嘆きの種で、諸所の名醫にかけたが更に直らあい。ろれて其年も空しく暮れて、明治十七年の九月となり、れ辰は最早十四となつた。ところが半七夫婦は或日何事からか口論をして、半七は腹の立つ儘にプイと家を飛出して品川の停車場に行つた所が此時滊車は出て仕舞つた跡なので、半七は何處へ行くと云ふ目的も無くブラ〳〵と大森の町へ來懸かると或家

の軒に「養老君之助」と云ふビラが下がつて居て、その末に「川崎町田中亭」と書いてある。半七は之を見ると、君之助とは豫て懇意であるし又娘お辰の踊りの師匠でもあるので、兎も角逢つて行かうと田中亭へ尋ねて行くと折能く君之助も居る、四方八方の話をして居る内に、家を出て來た事情を話さねばあちあい樣な譯にあつて、その大略を話すと君之助はヤーそんな短氣を起す者では無いと慰める、一力に半七に内密で電報を女房お房の所へ掛ける、ろの晩半七は君之の助に引止められて田中亭へ泊つて仕舞つた。話頭一轉此方は女房のれ房である。良人半七の行方

を君之助から電報で知らせて寄越したけれど、足腰の利かぬ娘お辰を獨り殘して行く譯にもいかず、種々考えた揚句に「斯う云ふ時にこそ磯吉親方に相談して見る事だ」と、三田の磯吉の所へ行つて事の次第を話して相談すると磯吉は一切合點して「宜しい已れが何うにか取計らはう」と云ふので、直に川崎へと志して出掛けたのが丁度九月二十日の朝である。偖て汽車が川崎へ着くや否や飛び下りて田中亭へ尋ね行き君之助に禮を述べる半七には其不心得を諭し其夜は又も田中亭に一泊して翌朝皆の人に暇を告げ仕度もソコ〳〵に半七と一緒に六郷橋から渡

しを渡つて、豫ねて噂に聞いた穴守樣の御穴を拜まうと、生茂る萱を押分け〳〵來て見ると海岸の二十餘丁許りの處に大小の穴が澤山あつて、その中に一束の藁が三本の杭で支へた大穴の所に炭俵が敷いてあつて其上に缺けた炮烙の中に目指魚だの油揚だのが盛つてあつて、外に赤い小さな幟と萱葺の隘い堂の中に人が二三人居るので二人は正しく之が御穴であると心付き恭しく禮拜して歸つて來て房にもこの事を話すと、れ房も半七が君之助の所へ立寄つて、それから君之助から此方へ知らせて來ると云ふのも全く稲荷樣の引合せであらうと大に悅

んで稲荷様を信仰する、その利益か娘れ辰の跛も三年程過ぎて全く癒たので夫婦の喜悦は譬ふるに物なくお辰が年來持古るした杖を神社へ納めて尚怠らず信心して居て現にれ辰は名を市川直廣と云つて今麻布區櫻田町に踊りの師匠をして盛にやつて居る。

(三) 蹇善四郎參籠の事

頃は明治十九年の秋の末野分の風に木の葉の吹散る或日の事蹇車へ一人の病者けた男を載せ、それを母子四人が交る〳〵綱を引張つて兩國廣小路へ差掛かつた者がある、この病者けた男は其名を善五郎と云つて、美濃國厚見郡鏡島村の者で、その綱を引張つて居る者はその女房や子供である。偖何心無く兩國へ差懸かると、何者とも知れず一人の男が摺れ違ひながら「オイ蹇さん早く穴守様へ行きな」と云つて、ハッと思ふ間に影も形も見えなくなつて仕舞つた。蹇夫婦はヤテ妙な事もある者と思ひながら、漸次魚河岸の方へやつて來ると、こゝには羽田の獵師も居る大森の獵師も居て漸く羽田の穴守稲荷様の事であると分つたので、蹇夫婦はこれに力を得て羽田へ行つて三七日の參籠をした處が其結願の日に不思議や金造腰の立たなかつた蹇が腰が立つたので、親

子は夢かとばかり悦んで御禮として御一七日の參籠をして、それから三田の木村莊平氏の所へ行つて、平常の惠みの禮を述べて、故郷の美濃國へ歸る途中で泊り合はせたのが、前に靜岡分社の所で書いた今澤れ熊の家なので、これ等も全く稲荷様の引合せあのであらう。

（四）外人靈驗に驚く事

横濱市山下町九十七番館に英利西人が住んで居る、その妾に「ゼーチン」と云ふ若き婦人が先頃から病氣で何か心が惱はれる様で、食事も一向食ふ事が出來ないところが或日不圖穴守稲荷様の事を聞いて然う云ふ利益の顯著な稲荷様なら信心して見やうと。夫婦連れて參詣した。すると其日から「ゼーチン」の病氣が大變快くなつて、間も無くすつかり平癒したので、夫婦は驚き且つ喜び御禮として石で六尺餘の狐一對を奉納して現に社殿の背後の靈山の麓に飾り付ける事とせり。

（五）支那人靈驗に感ずる事

京橋區新築町四丁目四番地に清國料理店讃香樓號と云ふ家がある。即ち支那人の料理屋で、そこの家に「河沂東」と云ふ支那人と、廣東廣州府香山縣人民小兒長何德泉と云ふ支那人が居て、この二人も穴守稲荷

様の霊驗顯著なるに感じて、明治二十六年三月二十日石の大鳥居を奉納して、今も社前に立つて居る。

（六）要舘主人神怒に觸るゝ事

神と云ふ者は誠に霊妙不可思議な者で、到底も人間の考へて及ぶ者では無いのである。羽田要舘の主人が或日社殿の東北一二丁先の堤に大穴のあるのを見付けて、若し水でも出て崩潰する樣な事があつてはならぬと人夫を雇つて其穴を埋めさせに遣かつた所が、豈測らんやそれが御穴の一つであつたので、未だ半分も埋めないのに三三人の人夫が突然氣が狂ひ出したので、見て居た人々は驚いて大騒ぎする、要舘の主人が之を聞いて初めて前非を悔ひ、直に本社へ參詣して勘辨を願ふ、それで漸やく人夫共の氣の狂つたのも直つた相な。

古書に「惡魔は陰を好む、故に多く夜中に現はる、神は然らず常に下界を現給へば伴らんとするも伴る能はず欺かんとするも欺く能はず、之れ神の廣大無邊なる所あり」とある、されば神を信仰する人は影日向なく誠意を持つて居ねばならぬ。

第八　白狐木像の由來

穴守稲荷様に參詣する人々は、本殿并に御穴拜殿の内に、四体二組の白狐の木像が納まつて居るのを知つて居る筈である。その四体二組の白狐の木像こそ穴守神社開基第一の奉納品で、實に靈品であるのである。今其出所を尋ぬるに、德川の流れ未だ盛なる頃、近江の國三上の城主(祿高一萬三千石)に遠藤但馬守と云ふ人があつて、この人も又稲荷を信仰されて、芝新堀の邸に稲荷堂を建てゝ齋起つて置いたのが、即ちこの木像で、其頃から種々の奇瑞があつたのが、維新の騒ぎに屋敷は毀れる、この木像も邸の明地の隅に菰の中に蔽はれて居たのを前に記した玉井磯吉

と廣島屋半七の兩人が、何か穴守様に奉納する者は無いかと探して歩いて、これを見付け出して元の遠藤家の家老職の、古川隼太と云ふ人に掛合で、古川氏も兩人の殊勝の心掛けに愛て、譲つて呉れた者で、明治十八年春三月初めつ方に、悉皆修復して奉納した者である。されば世に稀なる珍品で、今でも種々の靈驗を現はしと云ふ事である。

第九　奉納大鳥居の事

前に記した磯吉半七の兩人が、木像の白狐を奉納するに就いて、三田四國町の「いろは」總本家木村莊平氏

の宅へ行つて同氏の夫人の眞佐子に穴守稲荷様參詣の事を勸めると、生憎にも其日は差障りがあつて、眞佐子は細々と願意を書面に認め、両人に祈請を頼んだが、明くれば明治十九年の初春に、年禮者が數十人木村氏の家に集まつた中に、例の磯吉も來て居つて穴守稲荷の利益を述べるに、主人莊平氏も心を動かして、兎にも角にも一同で參詣しやうと云ひ出して、それから三四日過きて同勢四十餘人磯吉を案内として金杉橋の袂から船三艘で推出し、三時間程を費して御穴の裏堤防の處へ着いた。そこで一同御穴へ參詣し、木村莊平氏は詰合ひの堂守に向つて、何か

一つ奉納しやうと思ふが、何が能いか望みの品を云へと云ふに堂守は然らば何卒華表の奉納に預りたいと云ふので、莊平氏は自分で筆を執つて大署の寸法を定め、偖歸宅してから直に日頃出入りの棟梁の向井、市川の二人を呼寄せ、深川の木場へやつて材木を探がさせると共に、自分の處の空地へ七五三縄を張り渡して、棟梁連には烏帽子直垂を着せて古式に依り墨縄の式を行ひ、一ケ月餘を費して出來上がつたのを牛車五臺で持運んだのが、現に石橋の所に蘇然と立つて居る華表である

信仰は眞實の基である、されば信仰の無い人には決して眞實の心が無い、眞實の心が無ければ其人は善人では無い、

祈れ只一筋道に神の前
己が心を空しくはして

この歌は「心を空しくすると云ふのは邪な念や道ならぬ願ひ事を去れと云ふ事である。

第十　講社と講員

以上は穴守稲荷の靈驗に關した事であるが斯の如く靈驗顯著な神様であるから信者は頗る多い隨つて講社講中と云ふ者が出來て先づ明治二十年の春木村莊平氏と三田の袋物商福島金兵衛氏とが率先して、東京元講と云ふ者を拵へ今現に其講衆が三千五六百名ある。そこで各地方でも皆擧つて講社を拵へたので、今日の所では東京横濱の二ヶ所丈でも講社の數が百五十余講、この講員十万餘人と云ふのでは實に盛な事である。今その内で重立つて講社と講員の名を擧げて見れば左の通りである。（次第不同）

●芝　區

東京元講　幹事　木村莊平
　　同　　世話人　福島金兵衛
　　同　　御神酒講　前田丈助
　　同　　敬神講　前田卯之吉
　　同　　横尾延八

常樂講　同　豐澄辰五郎
向運講　同　中根友次郎
淺田嘉七
神德講　同　城所福三郎

●京橋區

穴守講　同　早川勘之介
瀧川忠次郎
千歲講　堀龜次郎
青物講　佐々木仙之助
供物講　山本和三郎
中川仙太郎
木睦講　田中芳之助

親祐講　丸川德次郎
田中政吉
常樂講　白井伊兵衛
末廣講　澤村忠次郎
松江講　松浦金次郎
江原助次郎
稻荷講三部　高橋市太郎
松本萬吉
新富講　さるや
前田厚長

●日本橋區

魚がし講　龜岡德太郎

出世元講　田邊與四郎
兩國睦講　伊藤美喜藏
水行講　柴田菊次郎
日本橋講　田井善藏
稻荷講　山崎定吉
睦愛講　淺井卯兵衛
大敬講　丸山鶴吉
辻伊十郎
百明講　北村萬之助
山田吉藏
清元講　青木岩吉
原金太郎

親友講　林策藏
積善講　辻竹三郎
眞砂講　柴田源三郎
白心講　佐々木
福壽講四部

●神田區

寶玉講　永井惣五郎
新盛講　打越德次郎
八千代講　內山利助
齋藤卯之助
奉幣講　馬場長太郎
住永貞輔

常燈講　米屋十兵衛
三社講　青木定
御鏡講　江原豊吉
御備講　杉浦長次郎
東西講　武内桑吉
御橋講　築地安次郎
穴守大神講　萩野専助
日榮講　石井忠次
三御神水講　根本孫兵衛
●下谷區　岡田傳

福守講　江坂龜次郎
稲荷講二部　川尻繁太郎
●淺草區
吉原講　松本菊次郎
元神泉講　堀川由藏
立身講　野口銀藏
明福講　灰谷寅吉
實明講　關口玉之助
太田勇松
澤田伊勢吉
高橋榮藏

實明講　内藤平次郎
實盛講　矢澤茂吉
下谷講　鈴木岩左衛門
御洗米講　吉田治三郎
稲荷講改め市村講　柴崎綿次郎
實珠講　吉田鉦三郎
福壽講　福田藤八郎
同五部　石黒銀次郎
同七部　中村重吉
當盛講　豐田桑次郎
日の丸講　杉木勝太郎
種村千代吉

實集講　大塚竹次郎
共同講　臼倉清吉
明治講　橋本平右衛門
東蠟燭講　岡田金司
福守講　稲毛田長藏
女人講　江原松三郎
鈴木勝之
長生講　長井材太郎
高御神水講　廣井兼吉
高野輔次郎
●本所區
睦美講　島村磯吉

千卷講　牧野儀兵衛
宮崎福太郎
藤田喜平
神託講　秋山鷹之助
酒匂參之助
常樂講　秋野豊吉
親愛講　室田庄次郎
銅鐵講　村上利兵衛
鈴木龜吉
心願講　伊藤菊次郎
明喜講　木村佐七
愛德講　森谷惣五郎

神心講　秋山壽三郎

●深川區

石橋講　鈴木一郎
富永新吉
梶田菊次郎
須永米藏
洲崎廓講　荒川桑藏
童子講　夏目要平
幸田四郎次
福德講　大塲又藏
共信講　新美兵次郎
丸船講　間格次郎

元神泉講　田畑長藏
福壽講二部　瀬登菊次郎
同六部　濱田外次郎

●麹町區

西蠟燭講　鈴木吉五郎
朝日講　小林源六
旭御神水講　大野六三郎
加藤茂八
福壽講八部　佐伯鐵次郎

●本郷區

北蠟燭講　中川兼太郎
荒鐘丑太郎

商盛講　篠田三和助
兩善講　久佐賀
河合佐市
一心講　土井六郎

●小石川區

永續講　坪井金兵衛
開運講　加藤角次郎
日進講　國府田文次
寶授講　大村宗三郎
伊豆原榮吉
穴守參神講　加藤重孝
神田貫一郎

福壽講三部　丸山松太郎
稲荷講四部　秋元鐵五郎

●牛込區

東講　栗原松五郎

●四谷區

御神講　植木竹次郎
盛大講　重喜

●赤坂區

元神泉講　鈴木伊兵衛
月參講　安藤常吉
額榮講　田中友吉
　　田中萬五郎
信盛講　田地與四郎
午の日　藤本儀右衛門
同支部　坂東常吉
御神水講　進藤金次郎

●麻布區

御神水講　古谷淺次郎
　　中西孝次郎
共立講　渥美弘太郎
　　櫨長太郎

●郡部

海運講（荏原）鈴木音次郎
　　鈴木三十郎

青物講（同）福石兼次郎
京實講（同）橋爪惣吉
開基講（同）村石又吉
　　伊東作次郎
御備講（同）森伊吉
開運月參講（同）栗橋巳之助
開榮講（同）鈴木太四郎
青物講（板橋）伊藤甚五右衛門
高泉講（豐多摩）安藤忠藏
御神水講（八王子）谷合彌八
　　萩原初三
　　關清助

●各縣

穴守明榮講（横濱）井川銀三
　　佐藤吉五郎
榮久講（同）增田勇三
羽田稲荷講（同）鈴木正明
　　矢野儀助
御膳講（同）宮下つる
緣組講（同）淺野重太
繁榮講（同）岡田源一郎
新盛講（同）小林貫次郎
　　小林常松
日の出講（横須賀）原田藤直

走水講（浦賀）大石長次郎
榮久講（神奈川）石川六兵衛
神德講（同新町）金子長吉
榮久講（同西濱）市原辰五郎
磯盛講（大磯）加藤荒吉
八雲講（小田原）運野健藏
瀨戸三吉
共榮講（厚木）大澤彦造
開盤講（二ヶ俣川）内田市太郎
御幸講（小田原）山橋金右衛門

御膳講（千葉）鈴木榮吉

開運講（木更津）石渡幸吉
一心講（猫實）福田清吉
福德講（行德）高橋新之助
守川講（同川原）早川竹次郎
寶心講（西海枝）渡邊勘兵衛
御供米講（金田）鎗田喜重郎
幕張講（馬加）石塚勇吉
鷲穴講

月參講（埼玉北足立）小澤準藏
鳩講（鳩ヶ谷）鳥海竹次郎
羽田講（同）秋元鷲次郎

明心講（同）高杉清吉
立志講（同志木町）一ノ瀨卯兵衛
本莊敬神講（兒玉）常木米太郎
飯能講（入間）島田安太郎
㊂羽田講（川越）原田安太郎
新井講（大黑府）新井文吉
穴守稻荷講（浦和）田中彌八郎
一心講（茨城大田町）宮城政之助
寶心講（北海道小樽）住友悅助
北越高田講（越後高田）早津長三郎

羽田稻荷講（靜岡清水町）青木久吉

同二部（同江尻町）原澤源平
同三部（同江尻追分）水野甚太郎
同四部（同久能山下）橋本富次郎
同五部（同燒津）三木初次郎
同六部（同沼津）瀧口定右衛門
同七部（同我入道）大嶽源次郎
同八部（同駒込）鈴木彌七
板倉安平
今津幸平

以上記した通り〜數多の講中が有つて、今日では殆ど日本國中に穴守稲荷の靈驗顯著なる事を知らない者は無いのである。

第十一　境内靈山

穴守稲荷のある所は前にも記した通り、要島又は扇が浦と云つて、景色と云ひ實に絶佳の處である。この景色眺望の能い穴守稲荷の祠の後方に當つて一つの山がある。高さ三十三尺に余り總べて巨岩奇石で積上げられて居て。下には墜道が有つて參詣人の往來の便を謀つてある。遠く之を望めば駿

河の富士をこゝに移したかと思はれ近く之を見れば奇岸巨石が或は虎の吼へて居る樣な形のもあり。或は龍が蟠つて居る樣な姿のもあり。千差萬別殆ど形容するに言葉の無い程で前には東京灣の沈の澥の聲が手に取る樣に聞こえて汚した心耳を澄ますに最も能く後は又池上川崎などを目の下に見て、實に支那の瀾湘八景にも劣らぬ程である。それでこの山に上るには一合目から九合目迄上つて、九合目から迂回した道を上つて頂上に達するのである。而し駿河の富士山に形取つたのである。偖この山の出來たのは今から五年前即ち明治三十一年の一月で

八千余圓の費用を費したのである。それでこの山を建てる事を發起した人は。富士山の先達豊行氏の長子で中講義福石兼次郎仙行と云ふ人で。又これに贊成し盡力した人々の重な者は吉原講。八丁堀講。同町青物講。日本橋講。芝神徳講などの人々である。

第十二　諸人盡力の事

附金子氏の碑

偖前にも書いた如く諸人が穴守稲荷の神徳に感じて。我も〳〵と眞心かいち力を盡す中に最も奇特な事がある。それで今其二つ三つを書いて見れば。

（一）福石行者の苦行

で。それは前章の富士山建立に就いてゝある。元來その福石行者と云ふ人は羽田村地生ひの行者で。父は福石傳次郎米山豊行と云つて神道修成派に屬して羽田村の富士講の先達で勤行に譽れの高かつた人である。それで今の福石行者は其長子であつて。米山行と云つて父の豊行氏にオサ〳〵劣らぬ名譽の行者である。誠に志堅固に戒を守る事實に嚴しく又行力に富んで居つて。申分の無い行者である。されば其の人は其行ふ所と云ふ所と互に少しも違つた所が無い。それで或人はこの人を稱して仙人になるので

はあるまいかと云つた程である。でこの人か四十二歳の時に不圖穴守稲荷神社の境内に靈山を築く事を思ひ立つて。その事を要館の主人の石關倉吉と云ふ人に相談した所か。この石關倉吉と云ふ人も敬神の心に厚い奇特な人で。直様福石行者の云ふ事に賛成して、其山を築く土を、寄附する事になつた。そこで明治二十九年の十二月に初めて工事に取掛かつて今日羽田に駿河の靈山の姿を見る譯にあつたのであるが。それに就いて福石行者の苦行は實に大變な者であつたのである。即ち三年の間の穀斷ち石富士山に籠つて。それからと云ふ者は三ヶ年間穀物は一切口に入れない。斯くの如く苦行して漸く明治三十四年の六月に此大工事を仕遂けたのである。實に其志は堅く且つ奇特な事と云ふ者は中々常人の出來る事ては無いので。それてあるから或人の仙人にあるかては無いかと云つたのも無理も無いのである。

（二）石關倉吉氏の奇特

石關倉吉氏は要館の主人で即ち福石行者と共に力を戮せて靈山を築いた人で。是れ又實に奇特な人である。元來石關氏は淺草の質屋で一厘一毛の利益を爭ふ所の商人であつたのである。ところが或時計らず羽田へ來て穴守稲荷へ參詣して。大に其神德に感

すると共に汎く世人にも此神様の德を知らせたい。それにはこの土地は實に景色も能し氣候も能しするから旁々參詣人の休泊所を拵へたなら、人々の便利にもなり且又神德も洽く人々に知れる譯であるからと云ふので初めて休泊所を拵へたのである。其傍ら農業にも非常に力を盡して桑苗三萬本を植付けて盛んに養蠶を營む。それから前に記した通り福石行者を助けて靈山を築く其外にも土地の有志者と相談して種々土地の爲めに盡くすと云ふので。實に奇特な人物で、今日穴守稲荷神社が汎ろく人に知られ。而して又參詣する人々が便利なのも全くその

石關氏の力を盡したからであると云つても能い程である。のである。これで石關氏の手柄はこれ計りでは無いので水行場を拵へたのもこの人の手柄なのである。元來穴守稲荷には其以前には水行場と云ふ者か無かつたのである。ところが石關氏が百方苦心して其頃要舘へ出入をして居た廣井兼吉と云ふ人と相談すると穿井者は事の容易て無いのを考えて中々相談に應しない。そこで石關氏は獨力自費を以つて廣井氏に穿堀する樣に頼んで。第一日目に七間堀り拔き第二日目に二十三間。それか第三日目の十時になつて突然清淨ある水が湧出たのてある實

に神水と云つて能い程で。されば參詣する人々も大に驚ろいて皆神水であると云つて其儘に神水と名付けてあるが今は廣井氏が其井戸を持つて居るのである。

（三）開運月參講の美擧

穴守稲荷の講社の多い事は前にも書いた通りで。讀者諸君は能く御存知の事である。けれども其講社が態々神様の側へ講社を新築する抔と云ふ事は少ない。ところが開運月參講では先頃から羽田へ態々講社を新築中で。栗橋巳之助氏外五六名の人々は熱心に運動して居る相であるが。實に奇特の行ひである。

附故金子氏の碑

この本を讀む人は金子と云ふ苗字を知つて居ない人は無からう。即ち穴守稲荷の爲めに非常に力を盡した金子市右衛門を知らない人は有るまい。それで今は故人になつたので。穴守神社の拜殿の左手に其碑が立つて居る。畢竟其手柄を忘れない爲めに其德を頌したので實に立派な者である。これに就いて思ひ出すのは彼の羽田を開いた祖先の鈴木彌五右衛門氏の事で。氏は羽田を開くに四十年の歲月を費して屈せず撓まず。遂に今日の盛況の基を作つたのである。されば其手柄と云ふ者は金子氏よりも勝ると

も劣る所は無いのである。されば近頃羽田近邊の人々が相談して氏の鴻業を表彰する計畫中である相な。若しそれが出來上つた事ならば嘸立派な事であらうし。又羽田の名所を一つ殖やす基ともなるであらうと考える。

人は一代名は末代
富貴は浮べる雲の如く。名譽は動かざる巖の如し

第十三　神苑の工事

穴守稲荷の社殿から午未の方角の一丁程行つた所に。平らな廣い原野がある、見晴らしの最も能い而して廣々として居て。東と北とは海に向つて居て東京灣築港の末端に續いて居る。南の方は多摩川上水の流れが周圍を廻はつて居て。西は大森の町に續いて居て。遠く西北を見れば彼の白扇倒懸と云ふ駿河の富士山が微かに眺められる。又前を、望めは東京灣の眞帆片帆。烟霞く漕船。白鷺の樣な帆前船。その先は水と空との淡然とした所に彼の常陸の筑波山が紫龜に微見える。實に浮世を離れた樣な心持がして頓と仙境に行つた樣である。そこで穴守神社の人々が今度こゝへ神苑を拵らへ樣として居るのである。それ

て其所の廣さが四千九百余坪で、それに池を堀り築山を築き種々の花や木を植え又いろ〳〵建物を建て様と云ふので。其費用に二萬一千七十五圓程懸かる相で。その費用は各講社の人々や又其外信仰の善男善女が醵金するのであるが。これが出來た上は穴守神社の基本財産にする筈になつて居て。今其發起人になつて居る人々は金子市右衛門、橋爪寅之助、横山惣五郎。伊藤米次郎の四名で。其外に賛成發起者として宮田彌。石關倉吉の二人も加はつて居て。既に東京府知事の許可を受けて寄附金を募集して居るが。其寄附金募集書の寫しは左の通りである。

穴守稲荷神社神苑神新設

寄附金募集書寫

茲に東京府武藏國、荏原郡羽田村に鎮座する穴守神社は明治十八年東京府へ公衆の參拜を請願し府廳は內務省へ申告し公許を得たり當時神社は境內敷地甚狹隘なり然るに其後今日の隆盛に至り奉納の物品日に月に增加し今や建設の敷地に困難し如何ともすること能はず就中春秋二季大祭の如き數千萬の信者遠路を厭はず折角參詣するも社殿に近くこと容易ならず空しく歸途に着く者其數を知らず

信者の遺憾少からず爲めに社員は勿論信徒の諸君も日夜之を憂ふ然るに今回境内接續地買收の示談相整ひしに付神苑を新設し境内を幽邃ならしめ一は信者の便宜を計り一は神社永遠の基礎を強固にせんとする然るに神社は其資金に乏し依て今回左記の如く東京府廳へ寄附金募集を出願し許可を得たり敬神の諸君各講中各位の御贊助を仰ぎ神社境内擴張致度何卒奮て御贊成御寄附被成下度候敬具

追白

神苑落成式の際寄附各位家内安全祈禱札を呈し尚毎月の祭日には家内安全營業繁榮を祈禱す金五圓以上の御寄附は神苑建設の碑に彫刻し永遠の紀念とす尤も講社は講名已人は姓名を記するものとす

明治三十四年五月

穴守神社々務所 印

發起人

金子市右衛門 印

橋爪寅之助 印

横山惣五郎 印

伊東米次郎 印

寄附金募集願

橋爪英麿印

東京府下荏原郡羽田村大字鈴木新田穴守稲荷神社は去る明治十八年九月公衆参拝の件御許可を得其後追々参拝者を増し已に現今の所にては日日数百千の参拝者あり隨て各信者より金石屬の燈籠水屋旗幟華表等の奉納物増加し然るに本社境内は狹隘なるを以て雜沓を極め時としては道路を來るも婦人女子の如きは参拝する能はず門前より他人をして代参致させ候樣のことに往々有之参拝者の遺憾尠からず是に於て神社境内地續きなる地所を買入神苑開設致度依て其費用として別紙要件により講社及其他の信者より募集致度候間特別の御詮義を以て御許可被成下度別紙方法書相添此段連署を以て奉願候也

明治三十四年五月

武藏國荏原郡羽田村
穴守稲荷神社社掌
橋爪英麿印
同信徒総代
金子市右衛門印

東京府知事男爵　千家尊福殿

橋爪寅之助㊞
横山惣五郎㊞
伊東米次郎㊞

募集の目的

一寄附金募集の目的は穴守稲荷神社境内に接續せる東南の地所凡四千九百坪を買收し別紙圖面の通神苑を開設仕度儀に御座候

募集の方法

二寄附金募集は穴守稲荷神社境内に社務所の名義を以て假事務所を設け各講社及信者の隨意寄附を受くるものとす

但領收金に對しては左記の領收證を以て取扱ひなさしむるものとす

募集の期間

三寄附金募集期間は本願許可の日より向年間とす

募集の區域

四

募集の金額

五金貳萬千七拾圓也

割印

第號證

一金

但

右御寄附相成正に領收候也

明治三十年　穴守神社
月　日　社務所印

殿

乙第一九七七號六（朱書）

荏原郡羽田村鈴木新田六百二十一番地

穴守稲荷神社社掌　橋爪英麿

明治三十四年五月七日付願寄附金募集の件聞届ク

明治三十四年五月二十八日

東京府知事男爵千家尊福印

第十四　神社附近の名勝

附名物

以上記した事で穴守神社に關した事は大概書き終つたのである。今度は最寄りの名所やら名物やらを

紹介するのであるが。第一に冷鑛泉の事から記す事とする

（一）冷鑛泉

冷鑛泉は水行場にあつて廣井兼吉氏の所有である。場所の廣さは二十匁はかりて、眞中に井戸があつて。鐵板で蓋がしてあつて。細い管から火か出て居るのは地中の瓦斯の作用であつて畢竟水酸化鐵の成分の爲めなのである。それでこの冷鑛泉即ち神水講に就いて御神水講と云ふ者か出來た。其設立趣旨は左の通りてある

御神水講設立趣意書

東京府武藏國荏原郡羽田村字鈴木新田に鎮座する處の六守稻荷大神は夙に明治十六年の秋官に出願して公衆參拜の認可を得たり自來敬神の人々群集し參拜は日に月に增加し講社も亦隨て數十講の多きを致す時に一得一失は世の免れさる處にして此の地や一面清水無く適井を求むるも皆濁水にして門前居住の者は勿論なり參詣人に至る迄不便を感ずること既に久し故に不肖儀當社を信仰して清水の湧出せんことを冀ふに年あり神地に二の清水あらしめは幾個の什器數點の奉納品に增すべしと日夜辛苦して寢食を忘れ此の

希望を達せんことを要慮しつゝ在りしか精神一つ到何事をか爲さん殊に赫々たる神威の在す處何ん

ら之れを躊躇せんと今回吉辰を卜し最良地を覘ひ神井を鑿たるに果して一の靈水を授けたり始め慮に數百間を鑿下げ得すんば必す良水の有るとあしと日も亦隨て幾十日或は幾百日を經過せずんば最低地に到らすと而已思慮せしも量らざりき地上より僅々數十尺を鑿下したりしに靈水迸々噴出し殊に其時日の如きも從て少時間の中に此大効を致さんとせば是そ神の賜物にして凡人の喋々するを得んや然り然れば此奇水をして

内務省東京衛生試驗所に出願せしに迅速同所主任の技手來車ありて先現場其他を視察し之れか定量分析せり該成績は別紙に擧く熟覽して虛說ならさらんとを知り給ふへし浴用内用とも人體に大効を奏し諸病を治療す加之之れに點火すれば忽水面火焔となる等實に奇々妙々の靈水あり恭しく神術を拜感すれば此の御神水を以て隨意に水垢離を行はせ浴湯とあして廣く諸人に滿足を與へなば一は神德を發揚し一は心願成就を導きは大壽を全ふする等積年の志願貫徹せりと云はずんはあらす仍ち余より御神水所を新設し併

て同講社を募集せんとす願くは敬神の諸君陸續
賛成せられて本講の盛大を期せんことを懇望す
敬白

御神水志願發起人

羽田村字鈴木新田六百十番地　廣井兼吉

明治二十九年十月　日

それから其分折表は左の通りである

報告

東京府荏原郡羽田村字鈴木
新田六百十番地
依頼人　廣井兼吉

第百九十九號

冷礦泉

右現狀並檢定量分折

依頼人の請求に因り明治二十九年九月四日主任者自ら實地其泉源に出張し檢したるに本泉は東京府下荏原郡羽田村元鈴木新田字東崎六百六十一番地北方海崖より大約六十三間を距る畑地に鑿設したる堀抜井の竹管より瓦斯と共に湧出するものにして之を貯溜するに木製圓形の水槽を以てせり試に其瓦斯に火焔を接するに點火し焔色宛然街頭瓦斯の如し而して湧出の際は其泉水

殆んど無色清澄あれども酖酌して放置するは漸次濁水を生じ終に少許の褐色沈澱(主として水酸化鐵より成る)を析出す異臭あく味ひ稍々鹹く反應は弱亞爾加里性を徴す今之れが定量分析を施行するに本泉一リトル(五合五勺)中に含有する固形物の總量は七五六瓦(一瓦餘)二分六厘餘にして其主要成分は左の如し

格魯兒加爾叟謨	五、二三六九
格魯兒叟謨	〇、八六一七
格魯兒麻倔涅叟謨	〇、六六〇九
重炭酸麻倔涅叟謨	〇、三四九二
重炭酸亞酸化鐵	〇、〇六〇一
格魯兒加倒謨	〇、一二八一
格魯兒亞爾密紐謨	〇、〇四一九
珪酸	〇、〇四〇〇
遊離炭酸	〇、一五一八
燐酸	痕跡
硼酸	痕跡
合計	七、五三八八

以上定量分析の成蹟に據れば本泉は礦泉分類上含鐵亞爾加里性食塩泉に屬す依て左に適應する醫治効用の概略を示す

(浴用)濕疹、腺病、粘膜病、膀胱加答兒
(内用)腺病、貧血、慢性腸胃加答兒、慢性婦人生殖器病

但し内用には同量の水を以て稀釋し用ゆ

し

内務省　東京衛生試驗所
所　長　衛生試驗所技師　田原良純印

明治廿九年九月廿三日

主　任　衛生試驗所技手　丸山長四郎印

次に御穴である

(二)御穴

御穴は拜殿の右に有つて。上には整然と屋根を葺いて三方を圍つてある。晝も猶暗い所で此あるが常に參詣の人が絶へないのである。御蠟の火の消えた時が無い。又信仰の人々が上げる供物が山の様である。それにこの御穴の砂を頂いて行つて自分の見世先へ撒くと云ふと見世が繁昌すると云ふので。信仰の人々は皆砂を持つて歸るこの御穴の守護は彼の鳴島翁の役目で極めて嚴かに守護して居る。社務所は前の方にあつて、こゝで御神圖や御札を出すのである。

(三)旅宿兼割烹店

要館、羽田館、西本館、少し離れて泉館、就れも繁昌の家で夏は納涼は云ふ迄も無へ海水浴に最も能い所で

ある。それに此邊は海も靜かに又遠淺なので女小供でも危氣あしに海水を浴びる事が出來て其上新鮮な空氣新鮮な食物を飲食するのであるから夏期には極能いので。態々日光や大磯などへ行く人は此仙境を知らない人と云つて能いのである。

（四）共同休憩所

樂壽亭谷衛修の計畫の倶樂部樣の共同休憩所があつて會員の申込みが非常に多く尙益々擴張する有樣で目下も折角普請中である。

（五）神社の華表

偖この華表の數は昔から數へた者が無ひ、仕や數へられないので。無論社務所の帳面を調べれば何百基あると云ふ事はチヤンと分かるが只勘定しで居やうと思つたなどでは到底一日や二日では數へ切れない。それも其筈で現に華表の大工が四軒もあつて。それが毎日々々せつせと骨を折つて拵らへては間に合はない相である。今さつと調べた所で一ケ月に納まる華表の數が大小合せて六百基以上で相當實に驚く外は無い

（六）飲食兼休憩所

有るわ〳〵穴守神社の入口から懸けて境外四五町の間にピツシリと兩側に飲食店兼休憩所があつて。

客を招いて居るが中々便利であるめで。休む人も多く殆ど客の絶間が無い程である。

（七）土產物

土產物は季節に依つていろ〳〵違ふ。けれども生海苔。蛟兒。蛤。蟹。海老。藻魚の種類それから自然薯。蕨。麥。細工。飴。繪圖四季の水菓子はなんでもある。

第十五　參詣の樂

人も知つて居る通り羽田は東京から餘り遠く無ひ隨つて女小供でも少し辛防すれば歩いて行かれるのであるが。併し便宜上から云へば矢張汽車の乘

乘つて行くのが一番速かである。或は又船で行くのも一寸面白い。既に

兩國矢の倉八百屋市場前

から穴守行きの船が出る。又

東京灣回航汽船會社

の船も羽田へ着く相てある。それてあるから大森から穴守。穴守から大師の間を往來する船に合せなら日々出入る船は非常な者で現に通船營業人か五百人餘りも居てそれか皆繁昌するとは何と盛事てはおるまいか。

陸の方では新橋から大森迄汽車に乘ゆて。それから

悠々と歩くか。又は川崎迄乗つて歩くかするのも面白いが。しかし今日は既に京濱電氣鐵道が出來て大森川崎間、川崎穴守間を往復し殊に回遊切符を賣出して四十錢出せば其日一日は何處で下りて何處から乗継いでも能いのであるから、至極便利でもあり又面白いのである。

能く有る事

穴守稲荷に御參詣の皆様へチョイと申て置きた事が御座いますが、これは各々方の御心得でもあり

旁々是非御氣を付けて戴きたいのは外でも御座いませんが、編者か時々穴守に參詣しまするに毎度列車が込み合いますので慌てゝ二等室へ乗込んだ事か御座いましたところが。ドーしても腰が掛けられないうこで驛夫に何處か空いて居る列車はあるまいかと尋ねて見ても何處にも無いと云ふので止むを得ず暫時其の列車の中に立つて居ましたが頗て滝笛一聲新橋を離れ、愛宕の山も芝浦も高輪泉岳寺も通り過き、早や我か滝車は品川に着にけり……

▲暫時はソーして立つて居たものゝ、ひい疲勞れ

て了つたので、幸ひ品川で隣の二等室が空いた樣子なので乘り替ると此の室には何處の馬の骨たか怪しからぬ奴が腰掛けの上に眞仰に踏み蟠がり居る帽子の緣に挿んで居る切符を見ると、ツタ一枚で二枚とは持つて居ない、其の癖一人で三人分を占領して居る。

▲編者と同時に此の室に入る來る子供連の貴婦人が乘り込んだ編者は其の隅に腰を掛けたが、此の貴婦人は此の馬の骨のため掛ける事が出來ないよつて其の傍に居つた先生が氣の毒がり、此の馬の骨に注意した、すると ふくれ面して

返答もしないで少しく足を縮めたので、ヤット腰掛けに尻だけを落ち付けた、

▲やがて滊車は梅に名を得し大森に着いた、すると此の馬の骨も編者と共に下りて共に電車に乘り替へた、ところが其馬の骨も一等編者と同等室に只二人、互に面と面を突き附け、發車を待つ間やヒマとはしり出した、そこで此の馬の骨の何んと思ふたか編者に向て話出した我れは不思議と奮慨なので堪らないから、應答するのも如何とか思ふたが、心を直し其れ相當の話をしながら鈴かを森を過ぎ八幡の伊勢源前で車を止めて下りて終

つた

▲此馬の骨は立派な容貌で、服裝といひ誰が目にも、立派な――紳士である、後ちに聞けば○○の○○であるとの事である、物のわからぬ連中あれば許し置くも、如斯き上流の紳士が此の如き怪らぬ事を行ふとはあきれて物が言へぬ、此の後如斯き人物があつたならば、乘客一同で刈車の窓から海の中へ叩き出しては如何、

信仰美談

穴守稻荷

跋

古人曰へらく仁者は山を樂み智者は水を樂むと然らば即ち山水を樂む者は仁と智と具へたるの人か。われ素より仁者にあらず又智者にあらず。而も常に水の美を好み。歷代多年或は北に或は南に飄浪其さに名勝を探る。而して未だ曾つて心耳俱に悅ぶべきの地を見ざるなり。何ぞや。北越の山南海の水。青巒の壘々として天に冲せる。或は又波濤里旺洋として白波風に激せる。素より其所に乏しからず然れども行くに輕車あり臥して青泉を掬ぶべく。居るに亭樓あり坐して萬綠に對するの景に至つては。天下未だ其景多しと爲さざるなり。頃日興に乘じて郊外に散策を試み。歩知らず〳〵羽田に向ふ。會々人あり告げて曰く君羽田の稻荷を知るか。而してわれ實に未だ之を知らざるなり。

此に於いて神心勃々即ち歩を進めて羽田の稲荷に詣づ。境内清趣前に山を望み後に海に沿ひ千里の涼風長へに俗腸を洗ひ。加之靈社殿を連ねて崇嚴誠に人の襟を正さしく。聞說く此神靈現燿灼たる者ありこわれも又拜を捧げて去つて又歩を　に向く。行く〳〵歩を運んで遂に大森に出づ。此地又實に清淨の地。而して東洋館と稱する旗亭あり。近者漸く工を竣り初めて業を營む。客室清雅加ふるに主人客に對して頗る慇懃。われ遂に醉倒。漸にして瀛笛に促され匆忙價を償ふて去らんとするに。價又頗る廉あり。われ徐かに謂へらく車に駕し清境に遊び靈社に詣で而して其歸途又此佳樓に飲む人生是より快なからんと即ち記して跋とす

牛坂萬華誌

明治三十五年七月七日印刷
明治三十五年七月十日發行

發行兼編輯人　鈴木嘉之助
東京府荏原郡羽田村字鈴木新田六百二十一番地

發行所　中央出版協會
東京市芝區愛宕町二丁目二番地

印刷人　福田四郎
京橋區彌左衛門町十三

印刷所　中央活版社
京橋築地三丁目十一番地
電話新橋二千七百八十五

特53
103

信仰美談 穴守稲荷

国立国会図書館

013796-000-1

特53-103

穴守稲荷（信仰美談）

鈴木 嘉之助／編

M35

ABB-0005